

果試ニュース

第18号 平成15年3月



キウイフルーツへの液体受粉作業



受粉済のキウイの花

前号の巻頭言で、「本県がマルチ栽培に熱心に取り組んだ年は夏秋季に降雨が少なく、マルチの価値が出ず、今回もそうなればお天道様のいたずらである。」と書いたが、14年度は10月末まで雨が少なく、記録的な旱魃年となった。このために、非マルチ園でも糖度が軽く13度を超え、逆に灌水をしなかったマルチ園は酸が高すぎる結果になってしまった。改めて、マルチ栽培の目的はどのような天候下でも高品質みかんを生産することであることを認識し、樹体の乾燥状態を常時観察しながら、過度の乾燥状態になる前に灌水を行なっていただきたい。

みかんは、14年産が裏年で、夏秋季が極端に乾燥したことから、冬季に異常低温でも来ない限り、15年産は相当の表年となる。平成9年以降の奇数年は、表年の上に、夏秋季の多雨で果実肥大が促進され、生産量が一層拡大している。願わくば、去年の夏秋季のような乾燥が今年も続いて欲しいが、3度あることは4度ある可能性が強い(?)。このため、当面は花を少なくする剪定、続いて摘果を徹底していただきたい。

今回の果試ニュースは、キウイフルーツの新受粉技術、柑橘新品種に見られるウイルス病、モモの平棚栽培の3篇を掲載した。キウイ栽培者は受粉に多くの労力を必要としており、液体受粉で労力の顕著な軽減が期待できる。新品種のウイルス病は、検定技術の改良によってチェック出来るようになったこともあり、たちの悪いウイルスが知らぬ間に県下に蔓延しないよう努めなければならない。モモの平棚栽培は均質な果実の安定多収が見込まれる。これらの新技術等が県下の果樹農業に寄与することを期待している。

場長 別府英治